



「見てごらん、
おかしな絵だ」



1956年度カンヌ国際映画祭 審査員特別賞受賞

ミステリアス ピカソ

天才の秘密

出演＝パブロ・ピカソ

監督／製作＝アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー

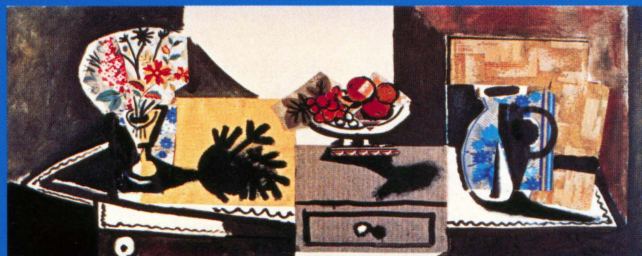
音楽＝ジョルジュ・オーリック

撮影＝クロード・ルノワール

1956年／フランス映画／1時間20分／スタンダード&シネマスコープ

© MK2 Diffusion and Inès Clouzot

配給＝Crest クレストインターナショナル



Picasso



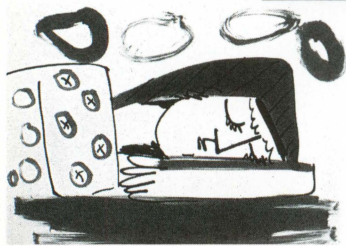
ミステリアス ピカソ

天才の秘密

トリュフォーが絶賛し、プレヴェールが讃えた。
56年カンヌ映画祭で審査員特別賞を受賞した幻の傑作。

線が生き物のように蠢く。
シナリオのない事件が今まさに起こっている。
肉体と魂と霊性、ピカソの天才を見た。

横尾忠則



なんたってピカソ

山田 宏一

画家の姿は白黒なのに、カンバスに描かれる絵は、単純なモノクロのデッサンから、いつの間にかカラーになっている。

カンバスといっても、マジックインクの速乾性と透過性を利用した特殊な紙(プラスチック性ともいわれる)で、裏側から撮影できるというものである。画家の手も筆も見えないのに、どこからともなく不意打ちのように次々に点や線が現われてくる。どんな点がどこに出てくるか、どんな線がどの方向に引かれるか、まったく推測できない。あれよ、あれよと見とれていくと、いろいろな形が出来上がり、その形がまた次々に変わり、具象になったり抽象になったり、めまぐるしい。アニメーションみたいだ。

タッチは荒らっぽく性急で無造作で、気のおもむくままに自然に大胆に描いて

スクリーンいっぱい、線が生まれ、色が踊り、形がつくられる。私たちはまさに、ピカソの脳裏に、瞬時瞬間に生まれる“閃き”に立ち合うのだ。『恐怖の報酬』『悪魔のような女』などで知られ、フランスのヒッチコックとも呼ばれたサスペンスの巨匠クルーゾーの「観客に手に汗握らせる」手腕が生み出すスリリングな興奮。そこに映るのは果たして天才の秘密？魔法？それとも奔放な遊戯？トリュフォー、アンドレ・バザン、ジャック・プレヴェールを熱狂させた幻の傑作が40年ぶりにニュープリントで公開。

ピカソがここで描く20点の絵は、撮影後すべて破棄され、もう映画にしか存在しない。

いこうに見える。ときにはいわずに描きのように奔放で屈託ない。ところが、何度何度も巨匠の「制作過程」を見せられていくうちに、まず白いカンバスに基本になる単純な線や形がつくられ、それが具象的な人物になったり動物になったり、



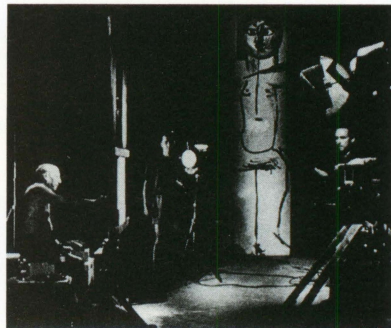
それが逆に抽象化されたりといったふうに変化して、それがまためっちゃくちゃに崩されて、あらたにやり直す場合はまた単純な線や形の組み合わせからはじめるという基本に戻ることが、なんとなくわかってくる。少なくとも、わかったような気分にはさせられる。だが、そこまでである。画期的な「透かし撮り」によって透けて見えるのは、線の引きかたが大胆きわまりないとか、魔術師のように正確にみるみるフォルムを現出させるとかいって巨匠の筆さばき、腕前のようなもの、あるいはモデルも使わずに汲めども尽きせぬイメージが生まれ、そのイメージを重ねていって破壊し、建て直し、完成に到達するまで変貌をくりかえすといった多少の思考のプロセスと仕事のコツのようなものにしかすぎず、芸術家の仕事を裏側から見ても内面の芸術的真實など——いわんや天才の秘密など——解明できるわけではなからうということである。

マジックインクで描いてカンバスの裏から撮影すれば、画家の創造の秘密を誰もがのぞき見られるというこの映画の出发点になったそもその発想は、ピカソ

本人のアイデアであったそうである。それで思いだされるのは、『オーソン・ウェルズのフェイク』でピカソがピカソの贋作を描くというエピソードだ。『ミステリアス ピカソ〜天才の秘密〜』という映画そのものが、ピカソがピカソを演じ、親友の映画監督、

アンリ・ジョルジュ・クルーゾーと共に謀って、その芸術的創造の時間を演出してみせた偉大なフェイクとは言えないだろうか。

「透かし撮り」によって素描と淡彩画の技法というか、その手口をたっぷり見せたあと、ピカソはクルーゾー監督に、これまでは上っ面だけだったが、もっと本質



をお見せしようと言う。すると大きく横長のシネマスコープ画面がひろがって、下絵から油絵の仕上がりに至る制作のプロセスがコマ落としのように(実際に画家が描いては筆をとめ、撮影が終わるとまた描きつづけるという方法で)とらえられ、「失敗作」なども含めて次々に色あざやかな展開になる。

「ピカソ」と署名したあと、まるでいたずらをして見つかった子供のようなピカソのちよっとてれくさそうな顔が印象的なのである。

5月15日より公開

銀座シネパトス

TEL 03(3561) 4 6 6 0